

バルザックのユートピア小説について

——「田舎医者」論——

西 川 祐 子

序

バルザックの「田舎医者」(一八三三年九月出版)は、しばしばユートピア小説と呼ばれる。この小説の出版直後(同じく一八三三年九月)に、エコー・ド・ラ・ジュヌ・フランス」紙は、次のような書評を載せた。「バルザックの『田舎医者』は、トマス・モアから家庭料理大全や農業指導書にいたるまでのすべてのユートピアの偽造にすぎない。この本は、エスプリも、文体も、面白味も、良識も欠いている。」

また、ルカーチは「バルザックとフランスレアリスム」(「農民」論)の中で、「農民と」、「田舎医者」および「村の司祭」を対置させ、前者をレアリスム小説、後者をユートピア小説と規定している。

「ユートピア」とは何か。Utopia はトマス・モアの造語であっ

て、ギリシャ語の *ou* (否定詞) と *topos* (場所) から合成され、「どこにもないところ」を意味する。トマス・モアはすべての住民が完全な社会制度の下に幸福に暮している架空の理想国を創造し、その国を「ユートピア」と名づけた。モアの「ユートピア」は、プラトンの「共和国」やアウグスチヌスの「神の国」をみならったのであるが、それらよりも、もっと直接的に、同時代の政治、社会問題をとりあつかっている。モアはユートピアという虚構に託して十六世紀の英国の社会を諷刺し、その上で理想的な国家を描いてみせたのである。

皮肉と、あてこすりと隠論とに満ちた哲学小説「ユートピア」(一九一六年)は、広くルネッサンス期のヨーロッパに流布され、深い影響を与えた。ラブレールの「パンタグルエル物語」(一五三二年)にもユートピア国の名がみられる。(パンタグルエルの母はユートピアの生れ。)

さらに十七世紀になると、「一人の旅人が理想国を訪れた見聞記

を語る」という形式の文学作品が、モアの影響の下に、おびただしく書かれる。モアが一見しては非現代的な、架空の国の物語を書かねばならなかったのは、現実の政治に対する強烈な批判をカムフラージュするためであった。この諷刺文学のスタイルが受け継がれていった。カンパネルラはカラブリア独立運動に参加して捕えられ、獄中で「太陽の都」(一六二三年)を書いた。その他に、ベーコンの「ニュー・アトランチス」(一六二七年)、ハリントンのオセアナ(一六五六年)などがある。さらに十八世紀、十九世紀、そして二十世紀のウェルズの科学小説まで、多少の変型はあっても、理想国を描く小説は書きつづけられた。そして「ユートピア」はもはや、モアの小説を指す固有名詞ではなく、すべての架空の理想国を指すことになった。理想国小説は、政治・社会・哲学思想を虚構に託する一つの伝統的な文学形式となったのである。

一方、十九世紀初頭には空想家と呼ばれる社会改良家達がいた。サン・シモン、フーリエ、オウエン等である。十九世紀初頭のヨーロッパは、フランス大革命に続く政治的変動の時代であり、イギリスのそれを先発とする産業革命の拡大時代でもあって、一種の混乱と活気が支配していた。その時代においてこれら社会改良家達は、社会の再組織を考えて。その際、彼等がユートピアづくりの基礎に置いたのは、新しい巨大な生産力であった。サン・シモンの「ジュネーブ人への手紙」(一八〇二年)、「産業組織」(一八二一年)、「産業者の政治的教理問答」(一八二四年)や、フーリエの「新産業社会」(一八二九年)や、オウエンの「新社会観」(一八一三—四年)はもはや、小説ではなくて、報告書、あるいは計画案であった。その計画は、丁度、「田舎医者」の舞台になったベナシスの村

のような小さな実験的小集団で実地に試みられた。サン・シモン主義者のつくったグループ、フーリエ主義者によるファランジュ、オウエンのニュー・ハーモニーなど各有名である。

しかし「ユートピア」という語は、モアの小説の題名であった固有名詞から、理想的国家、社会制度を指す普通名詞に拡大する一方、嘲笑的な意味が段々強くなった。すなわち「実現不可能な理想」、「子供だましの空想」という意味で、日常語としてはこのけなし言葉の意味がだんだん支配的になった。先述の「田舎医者」に対する「エコー・ド・ラ・ジュヌ・フランス」紙の批評の中にはあきらかに、この嘲笑の調子が読みとれる。

エンゲルスが、サン・シモン等の理論を空想的社会主义と名づけたとき、彼は、それに対して、マルクス主義を科学的社会主义と呼んだ。そしてルカーチは、エンゲルスが科学的社会主义と空想的社会主义を対置したように、レアリスム小説に対立させて、「田舎医者」をユートピア小説と呼んだのであろう。

この論文においても、「田舎医者」をバルザックのユートピア小説としてとりあげる。ユートピアは、虚構から出発する。空想社会主義者達は、先ず細部まで決められた理想の計画表によって、社会改良をくだでて失敗し、それゆえに空想的であると批判された。しかし、小説においては、レアリスム小説においても、虚構を組立てるという作業は不可欠である。そして、ユートピア小説は、政治、社会、哲学思想を理想国という最も単純化した図式に託する文学形式である。そこから逆に、あるユートピアを分析することによって、そのユートピアを描いた人の思想的位を正確に把握することが出来るのではないか。その意味で、バルザックのユートピア小

説は「人間喜劇」の中であって、その作者の思想をつかむに都合のよい見晴し台のような位置にある。

以下、「田舎医者」の中にユートピアを組立てたバルザックの思想をあきらかにしてみた。

(一) 「田舎医者」の位置

(a) 「田舎医者」の書かれた時期

「田舎医者」は一八三二年から三三年にわたって書かれた。「ふくろう党」によって文壇にデビューし、「結婚の生理学」で成功してから四年たっている。この四年間は、バルザックの生涯においても、最も注目すべき、一時期であって、若い、野心にもえたバルザックは自分の可能性を多方面にわたって求めつづけていた。

文学で成功したいという野心は、「結婚の生理学」の後に、「私生活風景」の諸作品、「哲学小説集」の好評がつづいてからは、ますます強く、「田舎医者」では大衆に広く長く愛読される小説を書くように考えていた。

文名が上ってからは、社交界に出入りするようになり、ぜいたくな生活がはじまる。社交界でも成功したいと考えたが、社交界の女性、カストリー夫人に失恋、その体験を「田舎医者」の主人公の告白に書いた。しかし、この「告白」の部分は後に書き直される。

ぜいたくな生活が始まってからは、印刷事業の失敗で出来た借金が増え、バルザックは、事業の成功とか、有利な結婚とかによって、一挙に借金をなくすることは夢みていた。「田舎医者」も書くまえからベスト・セラーになることを空想し、手紙で誇大

な宣伝をしたため、書店まで、その空想に感染して先に金を払い、買とる約束をした。しかし原稿は一年ものびるので訴訟事件がおこるということもあった。しかし、ここでもなによりも注目すべき野心は、バルザックの政治に乗り出そうという野心である。七月革命による選挙法の改正で、バルザックは代議士に立候補することが可能になった。一八三一年七月の総選挙に正統王朝派として立候補して落選、一八三二年六月「田舎医者」執筆の数ヶ月前にも落選している。

その間に、選挙運動のための政治論文を書いた。「二つの内閣の政策に関する調査」(一八三二年四月)、「王党派の立場について」(一八三二年)、「近代政治論」(一八三二年)。「田舎医者」も最初は、選挙運動のために使おうという意図があった。

これら野心と、その挫折が「田舎医者」の製作過程に深く影響したことは、ギヨンの「『田舎医者』の形成」(「バルザックにおける文学創造」)に詳しく研究されている。

「田舎医者」が書かれたのは、このように期待と失望が奇妙に入と混った時期である。バルザックの伝記の著者の多くは、「田舎医者」の書かれた時期にバルザックの思想はかたまり、彼の壮年期が始まるという。「人間喜劇」という彼の作品全体をおおう巨大な構想も、「田舎医者」出版の頃に生まれた。

(b) 「人間喜劇」の中における「田舎医者」の位置

バルザックは「人間喜劇」の作品として予定していたものの全部を書くことは出来なかった。しかし、その構想については何度も語っている。バルザックの指示の下にダヴァンが書いた「十九世紀風俗

研究」序文（一八三四年）、ハンスカ夫人への手紙（一八三四年十月二十六日、日付）、「人間喜劇の序文」（一八四二年）がそれである。

バルザックは「人間喜劇」の全体を大きく、「風俗研究」（*les Etudes de moeurs*）、「哲学研究」（*les Etudes philosophiques*）、「分析研究」（*les Etudes analytiques*）の三部に分ける。「風俗研究」は、いたるところで現実に起っている事実を描いて、バルザックによれば、「社会的結果」（*les effets sociaux*）を表現している。それに対して「哲学研究」では「風俗研究」の中に描かれた現象の「原因」（*les causes*）を追求する。

「風俗研究」には典型化された個性（*les individualités typiques*）があり「哲学研究」には個性化された典型（*des types individualisés*）があります。」（「異国の女への手紙」第一巻二〇五頁）

「結果」と「原因」の次に、「分析研究」の中には「原理」（*des principes*）がある。

「風俗研究」が土台（*la base*）であって、その上に「哲学研究」が、頂上に「分析研究」が位置するというのが、「人間喜劇」のピラミッド構成である。

「風俗研究」は、さらに六つの場景に分れ、その六つの間にも、段階の差がある。「私生活場景」、「地方生活場景」、「パリ生活場景」で、異った地方色ごとに社会生活が描かれたのち、その上に「例外的存在、全体または一部の利益を要約するもの」として「政治生活場景」、次に「その最も熾烈な状況」として「軍事生活場景」

が置かれ、さらに一番上に「田園生活場景」がのることになる。

最後に、社会を描いた劇のことを長き一日の行程と呼ぶことが許されれば、『田園生活場景』は、いわばこの一日の夕景にあたる。この篇には、最も純粋な性格と、秩序・政治・道德の大原則の適用がある。」（「人間喜劇の序文」）

「田園生活場景」には「田舎医者」「村の司祭」「農民」が入っている。そして、この三つにも、全体のピラミッドを支配しているのと同じ段階の差がみられる。「田舎医者」「村の司祭」はより頂点に近い。すなわち「田舎医者」は「哲学研究」に一番近いのである。

(c) 「田舎医者」の特殊な描き方

「田舎医者」は奇妙な小説だとか、小説らしくない、とかいう批評をよくうける。その根拠になる「田舎医者」の特殊な性格は次の三点にあると思われる。

①無葛藤、単調さ 「田舎医者」の筋は簡単である。ユートピア小説の伝統的な形式と同じく、一人の旅行者が、住民が幸福に暮している美しい村を訪れる。しかし十年前は、この村は貧しく白痴病に悩まされていた。医師ベナシスがその寒村を、活気にあふれた幸福な村にかえたのである。旅人はベナシスの館の客となり、彼の改良事業の話を聞く。羽日は、ベナシスの案内で村の繁栄をみてまわり、住民達に合う。見るもの、聞くもの、全てに感嘆した旅人は、

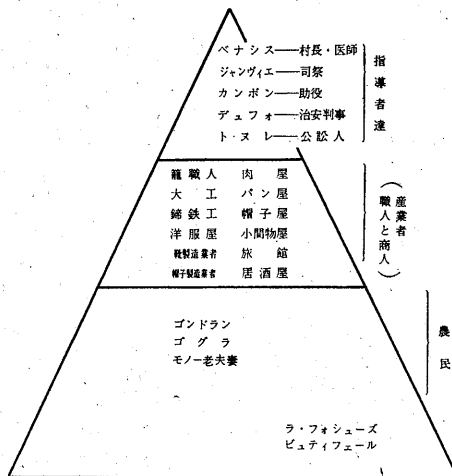
好奇心にかられて、このような事業を始めるにいたった動機をベナシスにたづねる。ベナシスは、青年時代のあやまちと、愛を失った悲しみを語り、自殺の代りに、社会改良の辛い仕事を選んだと告白する。

バルザック自身がいつているように、ベナシスが告白する愛の物語はこの小説の一挿話にすぎない（「異国の女への手紙」Ⅰ、一三頁）。小説の主題はベナシスの「村づくり」である。しかし、この主題はあまりにも簡単にすめられる。読者は、旅人の目を通して、事業の成功の結果だけをみる。十年にわたる事業の発展段階を読者はともに追っていくのではなくて、主人公の思い出話として聞かされる。しかも、ベナシスの話は、事実よりはむしろ、その結果を導いた原理の方が強調して語られている。

小説の葛藤は二つ以上の対立関係によって生まれる。ところが、「田舎医者」では、ベナシスの事業に反対する勢力は非常に弱い。村人達は、はっきりとした階級に分れているにもかかわらず、階級間には、完全な友好関係が成立していることになっているため、そこにも葛藤は生まれない。理想国では、すべての人間が幸福に満足しているという仮定があるのだから、無葛藤は、すべてのユートピア小説に共通の特徴である。

②典型的人物 「田舎医者」の登場人物達は、「個性化された典型」という、あの「哲学研究」の手法で書かれている。ベナシスはかつて、パリに挑戦する地方出の若い野心家という青年群の一人の典型であった。ジャンヴィエ司祭は、ラムネのような社会的司祭（prêtre social）の典型である。デュフォとトヌレは法律家の、カンボンは地方の小ブルジョワの、ジャコットは忠実な下女の、瓦製造

業の家族は律気な労働者家族の、ジエネスタスはナポレオン軍生きのこりの将校の、ゴンドラン、ゴグラは老兵士の、それぞれ典型である。高利貸の典型さえて、タブローがそれである。多数の人物が一人一人一つの世代、ある職業、ある階級などを代表している。小説の中では、それら人物は、ほとんど図式的に配列されている。



村の住民は、指導者と、産業者（職人と商人）と、農民の三つの階級に分れている。昔は全員が農民で、一律に貧しかった。ベナシスが来て、一般の生活水準を上げると共に、様々な産業者を誘致して、産業者階級をつくり、司祭と法律家を呼んで、指導者階級をも形づ

くった。この三つの階級でもって、ベナシスの村は、社会全体の小さな模型を表している。そして、ユートピアは元来、社会のあるべき未来の模型としてつくられたのであった。

登場人物達は、ある社会集団を代表する典型であると同時に、一人一人が一つづつ小さな挿話を持っていて、その挿話は後に述べるように、種々の「美德」の典型を表している。バルザックはこの小説の詩的性格を強調するが、それは、一つには少しづつ似通ったこれら多数の挿話の積重ねが、似通ったイメーシのくりかえしのような効果を与えるところからきているように思われる。

③対話小説 多数の挿話を旅行者とベナシスの対話でつないで、この小説が出来上っている。そして、プラトンの対話におけるソクラテスのように、主に語るのはベナシスである。第三章のベナシスの館における晩餐会の場面では、数人の客との会話になるが、それもベナシスが意見を述べるところが、圧倒的大部分を占める。

長い会話は、バルザックの小説一般の特徴であって、「ヌッチンゲン商会」のような、会話だけで書かれた小説さえある。しかし、「ヌッチンゲン商会」では生き生きとして自然な会話が、「田舎医者」では、読者を悩ます重苦しさを持っている。作者の政治・哲学思想を、ベナシスの口を借りてそのまま語らせようとする意図が露骨だからである。

「田舎医者」の三つの特異な性格は、この小説を書いた「哲学研究」の手法に原因があると同時にこれ等の性格はユートピア文学の性格でもある。「田舎医者」を哲学小説の一種であるユートピア小説と呼ぶことが出来る。ベナシス村がユートピアであり、ジェネスタスがユートピアを訪れる旅行者である。

(二) ユートピア（ベナシスの村）の構造

(a) 産業力——ベナシスの十年計画

多くのユートピア小説のように、旅行者がユートピアにたどり着くところから物語がはじまる。しかし、バルザックのユートピアはモアのユートピアやカンパネルラの太陽の都のように遠い太平洋に浮ぶ見知らぬ島にあるのではないし、モリスのノーホエアのように何千年の遠い未来にあるのでもない。場所はフランス、ドフィネ地方の村、時は二一八九九年春である。

しかし、十年前には、ここは幸福の地ではなかった。山に囲まれ、日光の射さない不健康な谷底に、伝染病に苦しめられ、無知で無気力なゆえに貧しい七百人の住民が、外界からとぎされてひっそりと住んでいた。訪問者ジェネスタスの間に答えて、ベナシスは現在には人口二千人に達し、まだ増えつつけようとしている活動的な村をつくりあげた彼の事業の話をする。ベナシスの十年計画は、彼自身によって三つの時期に分けられている。

第一期（十年前）——基礎工事業期——

医師ベナシスは先ず、伝染病（クレチン病）の根絶からはじめる。それが成功すると村長の地位を要請して、本格的な村づくりに着手する。村有財産を獲得して自由な行動が許されると大規模な土地改良をはじめ。灌漑を行って牧草地をつくり、畜産物を倍増さす。開墾して模範農場をつくり、それまでつくれなかった小麦を收穫する。グルノーブルと結ぶ道路建設も組織した。

土地改良に平行して、住民の教化に力を入れるのであるが、ベナシスの教育法は独特である。彼は専ら、今まで自給自息に甘んじて

いた村民の欲望を刺激することに努める。清潔な住居を建ててみせたり、新しい土地からとれた豊かな食物を並べたりするが、最も効果をあげたのは道路建設であった。道路開発と共に交通量は増え、金銭の流通がはげしくなる。住民の視野はひろがり、たちまち、自分も儲けたいという欲望にとりつかれ、その欲望から工夫の精神が生まれた。ベナシスは、いわば現状維持で満足しようとする精神をゆさぶり起して、活動的な、営利追求を目ざす精神につくりかえたのである。欲望を、ぜいたくを教える。所有の觀念を教える。利潤追求を教える。その利潤を積んで新しい産業に投機することを教える。ベナシスの教えたのは、「成り上る」方法であり、田舎医者の事業は、わかり易く書かれた「資本主義のすすめ」でもある。

「欲求を持たない民族は貧しい」（「田舎医者」クラシックガルニエ版三六頁）

「欲望が産業を生み、産業が商業を、商業が利潤を、利潤が安楽を生み、安楽が有益な思想を生みました。」（四二頁）

すでにこの時期にベナシスは初步的産業の一つ、籠製造業を村に誘致している。

第二期（五年前）——生活向上期——

「肉屋が一軒あるということとは、その地方の豊さを示すと同じく、そこに知性の存在することを示します」というのがベナシスの説であるが、ベナシスの村にも第二期には肉屋が開店する。各家庭でパンを焼く代りに、パン屋が出来て、仕事の分業がはじまる。その他に、小間物屋、洋服屋、帽子屋、それに宿屋や居酒屋までできるし、

産婆も開業した。

「働くものは食べ、食べる者は考える。」

物質的福祉がゆきとどくと、無料の小学校が建ち、村役場もつくられる。

第三期（三年前）——商業的繁栄期——

第二期までは、産業農業の生産も、消費も、地域的な規模を出なかった。そのままでは、村の繁栄は頭うちになる運命にあった。そこでベナシスは、遠く外部交易のできる可能性をもった産業を探して、靴と帽子の製造をはじめさせる。村にはすぐ五つの皮なめし工場ができて靴製造に皮を供給する。製品は、どんどん売れて、フランスの他県へはむろん、スイスまで輸出され、この村に年二回、開かれる靴、帽子見本市は、権威があるものと見なされるまでになった。これが村の現状である。やがては、二つの産業がこの村を町に変えてしまうであろうという予言でもって、新しく生れかわった村の歴史の話は終る。

その昔、病氣と貧困におしひしがれて、死んだように物音一つ聞えなかった村に、たちまち大農場や牧場があらわれ、いろいろな商店が立ち並び、工場が建つ。そしていま村の目貫き通りに立つと、たのしげな歌声や、いろいろな道具の低い、あるいは鋭い音が、方々の仕事場からわき上って、体をつつむようだ。このような魔術めいた急激な変化を生み出したのは新しい産業力であった。そして、この産業力は決して単なるバルザックの空想の産物ではない。フランスの産業革命は王政復古期にはじまったといわれる。道路、運河、

橋の建設による交通整備は、特に七月王政時代に行われた。予防医学の発達の事実もあれば、イタリアからの灌溉技術の輸入も行われている。土地改良は一つの流行でさえあった。ベナシスの十年計画の背後には、現実の産業革命の進行があったのである。バルザックの義弟は技師で運河工事に従事した。「田舎医者」を書くにあたって、バルザックは、この人から多くの知識を得たらしい。

(b) 博愛——精神的結合

ベナシスから村づくりの話をきいた翌日、ジュネスタスは、ベナシスに連れられて村をまわり、繁栄のさまを自分の目で確かめる。ジュネスタスは産業力がその繁栄を生み、繁栄が、人々が共に享受している物質的福祉を生んだことを理解すると共に、村の住民達の幸福な表情に彼らが精神的にも、何か共通の支えをもち、互いに強く結び合わされていることに気づく。

先述のように、登場人物達は一つづつ身上話をもっている。その多くは不幸な愛の思出である。旅人であるジュネスタス少佐が最初に出会う村の住民は、死んだ息子の代りに五人の孤児を引取って養育している女である。その挿話の中で、彼女は献身と労働の化身として、また母性愛の象徴として描かれている。この出合について、作者は次のように云う。「兵士は誰よりも、この木靴をはいた崇高ぼろ切れをまとった福音書の偉大さを理解することが出来る。」兵士は「市民的美徳」つまり愛国心を持っていて、祖国のために命を投げだす。「福音書的美徳」と「市民的美徳」は自己放棄によって

共通するから、互いに理解することが出来るのである。この二つの美徳は、ともに近代社会の生んだ個人主義と利己主義に対立する。

小説中の数多くの挿話の中で繰返されるのは、この二つの「美徳」の変型にすぎない。ゴンドランとゴグラの話の中には、熱烈な祖国愛と、いまだ消えぬナポレオンに対する忠誠の誓いがうたわれる。百才に近い老齢のモロー夫妻は鋏を握って死ぬのだと誇らしげに宣言する。彼等は労働の美徳を象徴である「墓の女」は両手のない乞食の男の子に献身的につくした話をする。しかし、「田舎医者」の中で最も数多くくりかえされるのは父性愛の物語である。ジュネスタスがベナシスを訪れた秘かな目的は、養子にしている病弱な男の子の健康を彼に託することであつた。ジュネスタスは村をまわる途中、息子を失って深い悲嘆に沈んでいる男に会う。また、皆から献身的に看護されている虚弱体質の小さな男の子もいる。父性愛は拡大されて、もっと普遍的な愛「博愛」にまでゆきつくことがある。ベナシスの場合がそれである。

第四章「ベナシスの告白」によれば、ベナシスには、私生児があつた。彼は、子供の将来に待ちうけている社会的偏見から子供を守りたいと考えて、はじめて社会問題、社会制度を根本から見なおすことをはじめた。愛児が死んでからは、社会改革の事業は、「家庭教師が子供を育てあげるように、貧しい地方を教化すること」となる。他の人物の挿話と同じ設定である。ベナシスの物語では、父性愛という同じテーマが一層つよく繰返されて、数多くの他の挿話を代表している。自己放棄にまでいたる愛、これがユートピアの住民達の魂をつなぎ合わせ、ベナシスは「博愛」を具現する象徴的人間となっている。

(c) バルザックのユートピアとサン・シモン主義

バルザックのユートピア村を支える二つの要素は、新しい「産業力」と「愛」の力であった。しかし、これらはバルザックだけに特有な観念ではない。しばしば「進歩」という語で置きかえられる「産業」と「愛」とは、社会的ロマン主義の標語といつてもよかった。ロマン主義の後期に於ては、作家の社会問題に興味をよせる傾向は強くなった。この傾向には、サン・シモン主義の影響が大きかった。

こういった文字の傾向に平行して、個人で、あるいは集団で社会改良を実践しようとする人達が多く出た。サン・シモン主義に限らず、プロテスタント、フリーエ主義者などがいたが、開発事業を行うなど行動形態は似通っていて、一般に博愛主義者といわれた。ベナシス像には、数人の実在の博愛主義者のモデルがあると云われている。バルザックはこれらのモデルから、博愛主義者の典型を創った。

同じくユートピア小説である「村の司祭」(一八三六年)と「田舎医者」の違いを、バルザック自身、次のように解説している。

「『田舎医者』が、文明に対する近代的博愛の応用だとしたら、『村の司祭』は、カトリック的悔悟の応用であるはずだ。(……)」

宗教は博愛よりも偉大ではないでしょうか、宗教は神のもの、博愛は全く人間的なものですから。」「(『村の司祭』一八四一年版序文) ここで、バルザックと、サン・シモン主義の交渉を少ししたとてみたい。サン・シモン主義の運動は一八三〇年頃に最も盛んであり、この年の前後には、サン・シモン主義の主張をもった新聞が

多く発刊された。一八三〇年、バルザックは、それらの一つ「政治新聞紹介」紙(Le Feuilleton des Journaux politiques)の寄稿家となった。その際、バルザックの執筆した記事には「サン・シモン主義者達が試みている新しい仕事には賛同すべきである。何故なら真理は多分、彼等の側にあるのだから」(コナール版全集、巻I、三八八頁)という言葉もある。バルザックはサン・シモン主義の立場からの書評を書いているのだ。しかし、数週間後には、バルザックは、この新聞との協力関係をうち切り、以後、サン・シモン主義者の、特に所有権に対する意見を、激しく非難するがわにまわる。だが、それにもかかわらず、バルザックは、サン・シモン主義者に対して一種の共感を持ちつづけたらしい。後に、バルザックが最も理想的な人物として創ったといわれるあのミッシェル・クレチアン(「幻滅」)、「カディニアン公妃の秘密」など)、「セナークル」の一員で、サンメリノ寺院の暴動に加って若くして死んだ英雄を、バルザックはサン・シモン主義者として描いているからである。

サン・シモンのユートピアは、新しい巨大な生産力を基礎において、当然、産業者階級が第一階級となり、産業者が公共財産を管理し、科学者と芸術家の助けを借りて、行政を行うという「産業社会」であった(産業者の政治的教理問答)。社会再組織に際しての人々の精神的結合の必要を強く主張し、統一原理として「新キリスト教」を考えた。「新キリスト教」の精神は「人は互いに兄弟としてふるまうべし。」「(『新キリスト教』第一の対話)であって、これは「博愛」に他ならない。博愛主義は、サン・シモンでも近代にはじまった個人主義に対立するものとして考えられた。

「新キリスト教」を信ずる者のなすべきことは「最も貧しい階級

の境遇のできるだけ速かな改善という大目的の方へと社会を向わさなければならぬ。(……)人間は最大多数にとって最も有益でありうるように社会を組織しなければならない」(「新キリスト教」第一の対話)である。「新キリスト教」には来世思想は全く欠けて

いて、宗教というよりは倫理だった。フランス大革命の合言葉の一つであった「博愛」に内容を与えたのはサン・シモンであるといわれる。(坂本慶一著「フランス産業革命思想の形成」参照)

さて、サン・シモンのユートピアの共同生産、共同管理、といった、私有財産否定につながる社会主義的な面ではなくて、普通、サン・シモンのブルジョワ思想家的側面といわれる部分に、「田舎医者」のベナシスのユートピアがかなりはつきりとした類似を示していることに気がつく。村の住民中、最も活気ある層、ベナシスの誘致した新産業に従事する人達は、サン・シモンの産業者(industriels)のイメージに酷似している。サン・シモンが、例えばベナシスのような産業資本家までも産業者に含めた点まで一致する。精神的結合の必要を説き、その支柱を博愛精神に求めたところも一致する。バルザックが、「キリスト教的(あるいは福音書的)美德」と名づけたものも、美德の名が示すように、宗教ではなく倫理である。「田舎医者」における伝統宗教は(カトリシズム)、サン・シモンが「新キリスト教」で指摘したと同じく、社会生活における儀式としての役割と、ついで来世思想の政治的道具としての役割を評価されているにすぎない。

「田舎医者」のベナシスは、新しい産業力と、新興の産業者階級を支持している、博愛主義的社会改良家である。

(三) ベナシスの政治・社会思想

(a) ベナシスの政治思想とバルザックの

「近代政治論」

ジュネスタスは視察して、住民達の幸福な表情に出合って、この村こそ「もっとも心たのしい王国」であることを認めた。「それほど多くの仕事(村つくり)をなさったそのあなたが、政府を啓蒙しようとなさらなかったのは不思議です」というベナシスに対する問が出てくるのは自然であろう。ベナシスは「たしかにわたしたちがこの小郡のために行ったことを、すべての小郡長は自分の小郡にたいして、市長に自分の市にたいして、郡長は郡に、知事は県に、大臣はフランスにたいして、つまり各人が自分の行動の領域において行うべきはです。」(五四頁)と答える。

それでは、村における政治、つまり村の行政はどのように行われているのだろうか。このユートピアの住民の中には、封建的世襲財産の上にあらをかれて、全く働かない人間というのはいない。サン・シモンが産業者と呼んだ人間、「産業者(industriel)とは社会の種々の成員の物質的需要あるいは好みを満足させる一つあるいはいくつかの物的手段を生産し、あるいはこれらをかれらのもとにとどけるために働く人のことである」(サン・シモン「産業者の政治的教理問答」)、すなわち労働する人間が住んでいる。

「なにも生産せずに消費することは社会的な窃盗行為ではないかと思えます」(九七頁)

しかし、これら働く人々が全部、平等な生活をしているのではない。(一)(b)、②でみたように、住民の構成は、はっきり三部分に分れている。指導者達は公職の他に模範農地の所有者だったり、木材商だったりして富裕である。次の製造業者、職人、商人達はおのおのの繁栄の道をたどっている。しかし一番下層の農民は、皆、仕事は完全に与えられているが、中には土地のないかなり貧しい人々もいる。もっともこのユートピアでは、靴や帽子の商品市場と同じく、土地も開墾しさえすればいくらでも手に入るかのように描かれているが。

「村にはいま、十二軒の富裕な家があり、生活の楽な家が百軒、繁栄の途上にある家が二百軒ばかりあります。その他の家族は一生懸命に働いているところです」(五二頁)

そして行政は、村長ベナシスが行い、司祭と法律家達がこれを助ける。他の二つの階層に属する住民達は、全然、行政にたづさわることはない。つまり、この村は、有能なる手腕と、無私無欲な高潔な魂と鉄の意志をかね具えていることになっている賢人ベナシスの支配する小型哲人国家である。

しかし、行政が国家を単位とするような大きな集団にひろがった場合はどうなるか。ここで、この小説の舞台が設定されている時代に注目しなければならない。一八二九年、すなわち三〇年の七月革命の前夜である。第二章「視察」で、ベナシスの貧しい人々に対する同情の言葉の中には、革命の暴動の予言がある。

「ああしたお役所の冷酷な仕打ちが、富めるものになりたい貧乏人の闘争を誘発するのですね、(……)たしかに貧乏人というのは毎日のパンを稼ぐことを余儀なくされていますから、そう長い間、闘う力はありません。がその代りにしゃべることが出来、かれがしゃべれば、おなじように苦しむすべての人間の心に反響を見出せるのです。ただ一つの不正行為も、その話を聞いた人間がみな、まるで自分自身にたいして加えられた不正行為のように憤慨すると、じっさいにはそうした人間全部と同じ数の不正行為が行われたとおなじ結果になりますからね。このパン種が発酵していきます。(……)貧民にとっては、盗むことはや過失や犯罪ではなく、復讐にすぎなくなるからです。」(九四頁)

だがベナシスの民衆観がもっとはっきりするのは「視察」の後、ベナシスの館にジュネスタスと村の指導者達をまねいて開かれた晩餐会の席上での、政治談義の中である。ここの会話の場面は、いわばベナシスがユートピアから見た一八二九年のフランス社会批判を語る場面であるが、その中のベナシスの民衆観をまとめてみると、

- ①民衆は復讐に立ち上るのが当然なほど不当に虐げられている。
- ②「美德」は民衆の中にある。
- ③しかし、かれらの崇高さにもかかわらず、民衆は無知無能力であって、政治に参加することは出来ない。無産階級は国民の未成年者のようなものだから、いつも後見人がいる。

ということになる。ベナシスの下した結論を立ち聞きた彼の忠実な召使は「あのやさしいだんなさまが、民衆をたたきつづせだなんて」とひどく驚いている。

ベナシスは、中産階級についても、

①百の大貴族を廃止すれば、一万の金持が特権階級になり、百の不快が一万の不快にふえて、社会的不幸の傷口がひろがるだけである。

②中産階級が貴族階級を打ち倒せば、今度は金持が貴族になり、すぐさま中産階級と民衆との闘争がはじまり、その闘争で、さらに民衆が勝つであろう、ところが民衆には政治能力がないのだから、そうなれば社会は混乱するばかりである。

という。ベナシスは以上の認識に基づいて、普通選挙制の思想をやつぎになつて批判する。

①普通選挙制では、数の多い民衆が勝利をおさめ、衆愚政治がはじまる。

②選挙による政府は絶えず批判されうるのだから、不安定である不安定な権力に、大きな働きが出来るはずがない。

③選挙民が政治に口を出すようになったこの四十年間、混乱があったばかりで、いざというときは、結局、ミラボー、ダントン、ロベスピエール、ナポレオンなどが出てこなければならなかった。大革命の幻滅が教えるものは、優越性の必然である。

こうして、ベナシスの結論は強力なヒエラルキーと極度に凝縮された権力の必要というところに落ちつく。ベナシスは専制政治を支えるために、一種のマキアベリスムも主張する。

①選挙制度に制限を加えて、形だけで内容のない制度にする。

②貧乏人に、現世での幸福追求をあきらめさせるような宗教をひろめる。

③能力ある人間には昇進の機会を与え、味方にまきこむことで、

革命を防ぐ。

バルザックが選挙運動のために書いた政治論文のうち、「近代政治論」は、発表される機会がなかった。「田舎医者」の晩餐会においてベナシスがうちあげる政治思想は、このバルザックの政治論文の内容と、ほとんど一致する。民衆観、中産階級について、選挙制度批判、専制政治論、などの思想は言葉づかいまで「近代政治論」と同じである。バルザックは、「田舎医者」のこの場面に、数ヶ月まえに書いて発表の機会がなかった「近代政治論」をそのまま挿入したのである。この場面の少し不自然な印象の原因は、そこにあると思われる。

しかし、王党派の代議士候補の政治論文には見つけることが出来ないのは、「田舎医者」における、はっきりとしたナポレオン賛美の態度であろう。

「とにかく大衆の感情を身をもって生き、しかも常に万事の細部にとらわれずに帰結のみを見ぬいて、みずからの精神のはばたき、声のヴォリューム、目差の鋭さをひろげていって大衆を支配すること。これはいくぶん、人間としての限界をこえることではないでしようか。それゆえ、こうした国民の父ともいふべき人間の名が永久に民衆にもてはやされるのは当然のことです」(一六〇—一頁)

このように漠然と書かれ、名前はかくしてあつても「国民の父」という呼び名、またベナシスがそれまでに何度もナポレオンの名をくりかえしているところから、ここで彼が行政家の理想としてナポレオンを考えていることがうかがわれる。

(b) 民衆のナポレオン

あかあかと灯のともっているベナシスの館の広間で村の指導者達が晩餐をとっている。その席上で政治論の結論として、ナポレオンが讃えられているとき、ベナシスの納屋には、村人が夜なべに集まっている。ろうそくのぼんやりした火影や、集っている人々のつぎのあたった衣服など、この集団は、館のまっ白なテーブルクロスを囲んでいる集団と見事な対照をなしている。しかし、二つの集団をつなぐのは、ナポレオンである。

晩餐の後、ベナシスはジュネスタスを誘って、納屋の乾草の中にかくれ、村人の夜伽の場面をのぞく。そこでは、ナポレオン軍生き残りの老兵士が、一同にせがまれて、何度もくも繰返したいつもの皇帝の話をはじめるのである。ナポレオンの誕生から、セントヘレナまでの長い叙事詩である。その中で、ナポレオンは皇帝、神の子、兵士と民衆の父、我々の父、ちび伍長、あの人、砂漠の獅子、といった無数の綽名でよばれ、その一つ一つに、民衆のナポレオンに対する信頼感、驚嘆、親愛の情がこめられている。

民衆にとって、ナポレオンの時代とは「軍隊の平等」が存在し、能力しだいでの無限の昇進の約束されていた時代であり、何よりも毎日、熱狂を感じながら生きることの出来た時代であつた。

「そんなわけで、一兵卒だつて、その力さえあれば、まかりまちがつて王座につくチャンスだつてあったんだ。」

「軍曹だつて、いやただの兵士だつて、君たちが、ときどき俺に

『ねえ、君』っていうように、彼にむかって『皇帝どの』っていうことができた」（一八〇頁）

ナポレオンの話には村人が熱中する情景はジュネスタスを感じさせずにはおかない。彼もまた、ナポレオンの下で兵士からたたき上げた人間であつた。

老兵士の話は、「民衆と兵士の父ナポレオン万才」という叫び声で終る。彼らはまだナポレオンはどこかで必ず生きていると信じているのである。

「田舎医者」のこの夜伽の部分には、後に王党派の新聞からの批判が集中した。

(c) ユートピアとナポレオン

ベナシスをはじめとする指導者階級の人間は、大革命に続く四十年の幻滅感から、ナポレオンに助けを求める。彼らにとっては、ナポレオンは、巧みに民衆をあやつる専制君主の理想像である。

ユートピアの民衆にとっては、ナポレオンは彼らに平等を約束してくれる人である。

お互いに違った解釈をしているにもかかわらず、ナポレオンの名は、村のすべての住民を感動させる力をもっている。彼等は共通のナポレオンの思出によつても、つながっているのである。

バルザックは、主な登場人物を一八二九年に五十代の人間、ナポレオンと共に生きた世代として描き、また、舞台を、現実には、エルベ島から帰還したときのナポレオンを熱狂的に迎えたドフィネ地方

にとる、という準備によって、真実感を出そうとしている。

納屋における夜伽の情景は、それだけ別に早く発表され、大変な人気を呼んだと伝えられている。「田舎医者」が書かれた時代にはナポレオン伝説が現実、大きな力をもっていた。

「田舎医者」において、ジェネスタスはユートピアの外の世界から来た旅人であるが、「あの将校さんはね、皇帝とベナシスさんのお友達なのよ」というラ・フォシューズの一言だけで、村人達に親しく受け入れられる。

「田舎医者」において、ナポレオンはベナシスにおとらぬ影響力をもった村人の理想像なのである。「田舎医者」ではナポレオンとベナシスは破壊と創造といった別々の仕事を分担する人間だという説明がある一方、ベナシスが「谷間のナポレオン」と呼ばれたりして、二つの像が混同することがある。

(四) ベナシスの告白

(a) 村づくりをはじめた動機

ジェネスタスから、このような改良事業をはじめた動機をたづねられて、ベナシスは、彼の過去の生活の全てを告白する。

若き日のベナシスは、地方の規律の厳しい中学を卒業すると、学問を身につけ、立身出世することを夢みてパリにやってきた。少しは才気と野心をもった青年であった。貧乏学生時代に一人の娘に愛され、子供も生まれた。しかし突然に遺産が手に入ると、たちまち社交界に入りびたりになって、そのつつましい女を捨てた。パリに渦まいている快樂と野心の誘惑にひかれていっているうちに、財産はすく

減ってしまう。二年の後、捨てられた女は死ぬ。ベナシスは目がさめて、悔恨にさいなまれながらも残された子供を育てることで自分を慰めようとした。その数年後、理想的な女性に出会い、結婚したいと望む。しかし、彼女は上流の、しかも禁欲的なジャンセニストの家庭に育った。ベナシスの過去の放蕩生活と、彼に私生児がいるために結婚はゆるされない。かさねて愛児も死んでしまう。絶望のはて、行動的祈りともいふべき生活を選んで村に入った。

こうしたベナシスの過去における体験が、「村づくり」に生かされることになっている。ベナシスにとって村づくりは、丁度子供の教育のようなものである。また、ベナシスが少年の頃に受けた苦しい厳しい教育は否定され、ベナシスのユートピアではジェネスタスの息子アンドリアンは密猟者ビュティフェールにあづけられる。ベナシスの恋人を縛った厳しい禁欲的な宗教は批判され、ユートピアの宗教は行動的、現世的宗教である。しかし、何よりも重要なのは、ベナシスの青春を毒したパリ生活の批判である。

「パリが引起す感動には、敏感な感受性をそなえた人間にとって、もともと残忍なところがあります。上流社会の人間や富裕な人間がパリでほしいままにしている利益がむやみに情熱をかきたてます。(……) それにしても無数の危険にとりかこまれているので、この快樂を味わおうとすれば、まずそれが惹起すどのような些細な行為をも予測し、そのいっさいの結果を計算しておかねばなりません。そうした計算がやがて利己主義にみちびいてゆきます。(……) こうした闘争がパリのこのうえもなく優雅な軽薄さ、感激をよそおう熱狂のかけにいつも政策や金銭がかくされて

いるあした風俗を生み出すのです。」(「田舎医者」二〇一頁)

小説の前半にあったベナシスの現代文明批判「今日では社会を支える支柱といえ、利己主義しかないのです」、「われわれは、物質的利害と実利本位の時代に生きています」といった言葉は、青春時代のパリ生活の体験をもとにしていわれていることがわかる。

パリと地方の対立は「風俗研究」の大きなテーマの一つだった。田舎の生活は遅鈍であるが、それだけに悪徳も薄められる。パリでは、金銭の流通度のはげしさに比例して生活の変化も激しく、人々は金や地位や快楽を求める激しい競争に体をすりへらし、その競争の中でお互いに孤立する。だから、ユートピアは「田園」におかれたのだった。そしてユートピアをつくる人達は、ベナシスをはじめとして、皆、外の社会の生存競争の犠牲者である。ゴンドランとゴゲラは政府のエゴイズムによる犠牲者。ラ・フォシユーズは金持のおもちゃにされた。小学校の先生は市民憲法に宣誓したため農民から排斥されている僧侶である。ベナシスはこれらの人間を救うためにユートピアをつくった。だから、ユートピアは豊かな生活の待っている場所であり、そこでは人々は友愛と連帯の感情で互いに結ばれていて、もはや孤立感に苦しむことがない。

ベナシスの告白は、現代生活に疲れたすべての人間に共通するものであって、この小説のユートピアに存在理由を与えている。ベナシスが村づくりをはじめめる理由は、単に、失恋や、子を失った悲しみをまぎらわすためではなく、そういった不幸を生みだしたもつと深い原因、腐敗した現代生活をとりのぞくためであった。

ベナシスが村づくりをはじめめる動機は、バルザックが「風俗研究」

で現代社会生活を描いたうえでユートピアを組立てねばならなかった動機に直接つながる。

バルザックは、「田舎医者」の完成まぎわに、「告白」の部分を書き改めている。古い「告白」では、ベナシスは社交界のコケटना女に裏切られて絶望し、その絶望をなぐさめるために村づくりをはじめることになっている。この古い「告白」には、バルザック自身のカストリー夫人に対する失恋の体験が、かなり感傷的な調子と漠然と抽象的ないまわしで書かれている。コケットな女性を囲むパリの社交界の批判には後の新しく書き直された「告白」にまで残るような文章もある。しかし、それも、文明批評にまで高められていない。前半の村づくりの話がだんだん厚みをまして単なる慈善事業から、本格的な社会改良の内容を具えるにつれて、古い「告白」は前半を支えるのに不充分になってきたのである。

新しく書き直された「告白」に描かれるベナシスの青春の物語は、ルシアンやラスティニヤックなど、「人間喜劇」に登場する青年群に共通する普遍的な内容をもっている。小説前半のユートピアを支えるのはこの「告白」であると同時に「風俗研究」全体でもある。

(d) 田園小説の流行と「田舎医者」

都会から逃れて田園へ、というのもロマン主義時代の流行であって、田園小説が多く書かれた。バルザックの「田舎医者」には同時代の田園小説に共通する部分と、相容れない部分がある。共通する部分は自然讃美の部分であり、相容れない部分とは、バルザックの反自然の態度である。

①自然、讚美 「田舎医者」の村を囲む美しい自然には、花を愛し、雲にみとれるう・フォシユーズと、密猟者のビュティフェールが住んでいる。二人は「他の人間とは暮せない特殊な人間」であって、ユートピアの住民の中でも最も非現実的な存在として描かれている。百姓女の骨格をもちながら優美なう・フォシユーズと、大胆な敵な勇気と、精悍にひきしまった筋肉とを具えているビュティフェールは「自然人的」理想として書かれている。ジェネスタスの息子の教育がこの二人にまかせられることから、ユートピアの中では、この二人が人間がそこへ帰るべき人類の理想の原型と考えられていることがわかる。

また、ベナシスがかって自分の息子に試みた教育法は、遊びながら教育する、純粹に正確な言葉だけを使わせる、真実に対する愛、虚偽に対する嫌悪を教え、言語動作のすべてにおいて質朴で自然な人間に育てることを目的としている。

②反自然、ユートピアは美しい村である。視察の途中、急に目前に新しい眺望のひらける曲角にきたときジェネスタスは、こんなすてきな土地にお住いとはうらやましいかぎりですな」と思わず驚嘆の叫び声を上げ、ベナシスは「自然にたいする愛だけは、人間の希望を裏切ることのない唯一の愛です。」と答える。しかし、二人がその下に思わず足をとめる緑の大伽藍にたとえられる丸天井は、十年前の道路建設の際、並木に植えたボブラが見事に茂ったものである。「田舎医者」の風景は、人間によって造りかえられた自然なのだ。このユートピアの中では、人は人間の労働の結果である自然に感動している。

バルザックは、「人間喜劇序文」の中で、次のように反ルソーの

立場を強調している。

「人は善でも、悪でもない。彼は生まれるとき本能と能力を具えてもつ。社会はルソーが説いたように、人間を頽廢せしめるのではなくて、かえって完成し、よりよき道へ進める。しかし、利益が悪の傾向を助長する。キリスト教、なかでもカトリシズムが、私が『田舎医者』で述べた通り、完全な組織として人の頽廢へのうごきを止め、社会秩序を守る最大の要素となっている」

「田舎医者」のユートピアで、道德を支えていたのは、いわゆる宗教ではなかったが、この文章から、バルザックは少くとも「田舎医者」の村を「社会」から逃避するための場所として描いたのではなく、よりよき「社会」として創作したつもりであることが推測される。

バルザックにとって「田園」は都会における激しい生存競争が、よりやわらげられた形で存在する場所にすぎない。ここにも都会と同じ原則が支配している。「田園」には自然の楽園があるのではなくて、楽園は、人間がつくらなければならない。ここにバルザックの反「自然」主義があつて、その点が他の田園小説から「田舎医者」を区別し、この小説をユートピア小説にまで高めている。

結 論

ユートピアはいわばよりよき社会の見取図である。バルザックは、「風俗研究」で行った十九世紀フランス社会の觀察に基いて、なかでも、パリ地方の対立関係の認識に基いて、「田舎医者」でユ

ートピアを組立てた。

バルザックのユートピアは、パリ生活に代表される近代ブルジョワ社会のアンチ・テーゼとして設定される。パリでは、人々は絶えざる生存競争の緊張に疲れ、競争のエゴイズムの中で、他人との孤絶感になやまされている。

村の、ユートピアでは、新しい素晴らしい産業力が全ての人に豊かな物的福祉を与えている。また人々は「博愛」の精神でつながれて、精神的にも幸福である。

ユートピアの二人の象徴的人物が、このユートピアを支えている思想を表している。社会問題については、ベナシスに代表される博愛家の思想が、政治では、ナポレオンに代表される啓蒙専制君主の思想がユートピアを支えている。

このユートピアの構成に矛盾をみつけることはやさしい。ユートピアは、ブルジョワ社会の悪を克服するために出発した。しかし、ユートピア村は、ベナシス自身によつて「新興商業国」にたとえられている。そこでは、新しい燃料が次々と投げこまれて、勢よく燃焼をはじめたような、新興の、上昇期の資本主義が熱心に讃美されている。村では、すべてが新しく、生命に満ちて活気づいている。だが、ベナシスがこんなにも熱心に教えてまわっている資本主義的経営法、無制限の競争、はやがては、ベナシス自身が誇らしげに予言しているように、村民をブルジョワに成り上らせるだろう。そして新興資本主義体制が自己の法則によつて発展しつつづけるとき、いつかは、ベナシスが批判してやまなかったあの功利主義的文明がパリではなくて、このユートピアを支配しないとは決していえない。「田舎医者」のユートピアは、解決をもとめて堂堂めぐりしている

のであって、すぐ先に破たんが待ちうけている。

ユートピアの思想的支柱は、ベナシスとナポレオンの二本の象徴に分けられている。博愛主義者ベナシスは、結局はナポレオンに助けを求めねばならなかった。バルザックはサン・シモン主義を徹底的には信頼しなかったと同じく、自己の創造した作中人物ベナシスの博愛主義が、現実世界をゆり動かすほどの影響力を持つと信じることは出来なかった。そこで、いまだ人々の心理に大きな影響力を持っていたナポレオンという象徴に力を借りたのである。そして、ナポレオンの歴史的二面性は、民衆の友であると同時に専制君主であるという作中人物ベナシスの二面性をおおうのに好都合であった。

こういった「田舎医者」のユートピアの矛盾と破綻の中に、バルザックの思想の位置がとらえられる。「田舎医者」においては、バルザックは正確には王党派でなく、真実の民衆派でもない。彼が最も好意をもって描いたのは、産業革命から生れようとしている新興の成り上り者達の階層であった。